

秀しげ子について

中 友里恵
野 村 晴 佳

文壇の寵児だった芥川龍之介の自殺を語る上で欠かせない女性がいる。

僕は過去の生活の総決算の為に自殺するのである。しかしその中でも大事件だったのは僕が二十九歳の時に秀夫人と罪を犯したことである。僕は罪を犯したことに良心の呵責は感じてゐない。唯相手を選ばなかった為に（秀夫人の利己主義や動物的本能は実に甚だしいものである。）僕の生存に不利を生じたことを少なからず後悔してゐる。

（『芥川龍之介全集』第十五・十九卷、岩波書店一九五四—一九五五）

この秀夫人とは女性歌人の秀しげ子のことであり、『藪の中』（『新潮』一九二二年一月初出。初刊本『將軍』新潮社、一九二二年三月）『齒車』（『大調和』一九二七年六月「齒車」の題で「一、レエン・コオト」のみ発表。同年十月『文芸春秋』にて全文発表。初刊本『西方の人』岩波書店、一九二九年十二月）『或る阿呆の一生』（一九二七年六月二十付けで久米正雄に託された遺稿、『改造』一九二七年十月）などに彼女の影を見ることが出来る。多くの研究者が芥川を研究しているがしげ子に対する研究は未だ進んではいない。しかし本学の卒業生でもある彼女を私たち

日本文学科の学生は少しでも知っておくべきではないだろうか。その為、今回はこの秀しげ子特集したい。秀しげ子に関する資料で最も詳しいものは中田睦美氏の「〈秀しげ子〉のために」¹⁾である。今回この資料を基とし、さらに大正時代の女性と恋愛について調べることで、しげ子の新しい面をみてみたい。

一 芥川龍之介側から見た〈しげ子〉像

芥川龍之介を研究する際、しげ子の存在はどうしても『藪の中』の〈真砂〉や、『齒車』の〈復讐の神〉、『或阿呆の一生』の〈狂人の娘〉といった魔を感じさせるものとなる。これは芥川が決して批判を許さない「遺書」という形で彼女を批判していることが大きいのではないかと考える。そして、研究者がしげ子について論じるとき先ず芥川を自殺に追いやった一因という偏見を拭い去れないことも彼女の研究を妨げる原因になっている。

ここで従来の〈秀しげ子像〉を述べたい

① 芥川龍之介

『餓鬼屈日録』（『サイエンス』一九二〇年三月、未発表を含めて初刊『点心』金星堂、一九二二年五月に収録）によれば、一九一九年（大正八年）の六月十日に岩野泡鳴が主催する十日会に参加しており、ここで秀

しげ子と初めて顔を合わせたと考えられる。そして同年九月十日に再び十日会に出席し、「夜眠れず」の言葉を残している。この頃頻繁にしげ子についての記述があり九月十二日「愁人亦この雨声を聞くべしなどと思ふ。」九月十五日「始めて愁人と会す。夜に入って帰る。心緒乱れを止まず。自ら悲喜を知らざるなり。」としげ子を「愁人」と呼び芥川がしげ子に対して並々ならぬ関心を持っている様子がわかる。九月十七日「不忍池の夜色愁人を憶はしむる事切なり。」九月二十二日「臥榻に横はつて頻に愁人を憶ふ。」九月二十五日「愁人と再会す。夜帰。失う所ある如き心持なり。」九月二十九日「芝へ行つて泊まる事にする。愁人今如何。」と続く。

二人の出会いには芥川が初めて出席した十日会で、芥川は友人の広津和郎に「おい、僕を紹介してくれ」と言い、翌日には手紙と自分の短編集を送るといった積極的な行動をとっている。元来浮気性だった芥川のこの行動は『新潮』の「文壇風聞記 芥川氏の社交振り」として一九一九年（大正八年）八月号に取り上げられた。このリーグは神経質な芥川のものとは考えられないため、秀しげ子側からのものと考えられている。

しかし、この時期以後（愁人）は日記に現れず小説の中に姿を変えて現れてくる。以下秀しげ子との関わりが深いと言われる作品を挙げる。

『秋』（『中央公論』一九二〇年四月初出。初刊本『夜来の花』新潮社、一九二二年）この作品は芥川がこれまで古典を題材にしていた作品から、現代を扱った作品へと転換を図ったものである。作品の主人公信子は女学校を出ており、しげ子が素材を提供したものとされている。『藪の中』では人妻・真砂を登場させ、男を狂わす魔性の女性としている。芥川作品の中では人妻は悪女として夫を裏切る存在になっており、これは人妻であるしげ子の影響が考えられている。『河童』（『改造』一九二七

年三月初出。初刊本『芥川龍之介全集』第四巻、岩波書店、一九二七年十一月）では、奇妙な河童の生態のうち求愛の際、雌が雄を追いかける様はしげ子の「動物的本能」で芥川を追う姿をイメージさせ、雌河童に捕まった雄は大切な嘴が腐り落ちるといった描写は芥川がしげ子の存在が自身の破滅を導くと考えていたといっても良い。『菌車』（三、夜）に「狂人の娘」であり、「ミイラに近い裸体」の「復讐の神」として夢に登場している。『或阿呆の一生』では「狂人の娘」として「彼」の前に度々現れ、息子が「彼」に似ていないか尋ねるなど「彼」の人生に暗い影を落とす存在として登場している。

② 芥川文（龍之介の妻）

『追想 芥川龍之介』（芥川文（述）中村妙子（記）『追想 芥川龍之介』筑摩書房、一九七五年二月）には芥川の妻である芥川文がしげ子について回想する箇所がある。

はじめのうちは、日曜日ごとに私の家を訪れて、主人と話をして帰りました。（略）老人達は、あまりしげしげと訪ねて来る彼女に不審を抱いている様子でした。

私は、（略）あまり気にしておりませんでした。

ここではしげ子が芥川の家足繁く通っていた様子と、それに戸惑う家人が読み取れる。また芥川が養生のために借家に引っ越した際の回想には「大正十五年の夏、（滞在先の借家に）案内を乞うて秀しげ子夫人が子供を連れて訪れて来ました。（略）主人の病氣見舞いに来た」と、見舞いに来るしげ子の姿が描かれている。この時芥川の伯母はしげ子を「龍ちゃんの女」と呼んでおり、居づらくなっただしげ子が人目につかぬよう

帰っていったとある。この二点からしげ子は大変積極的に芥川的生活領域に侵入していたことが伺える。

私は主人の浴衣の洗濯に井戸端へ出て、浴衣の袖を探しました。

(袖の中の紙くずを) 拡げてみると、「秀しげ子」の名前が二行ばかりの書きかけの中にもえました。(略) 夫人との関わりを、清算したかに見えましたが、事実はそのようではなかったのだと、私はその時思いました。

このように文は秀しげ子と芥川の間係を知っており、芥川が中国旅行によってしげ子との間係を清算したものと考えていたことが分かる。芥川の裏切りに対するこの淡々とした語りは逆に未だに残る文の当時の憤りや悲しみを伝えているように感じられる。

③ 芥川の友人

広津和郎の「彼女」(『小説新潮』一九五〇年三月)にもしげ子の影が伺える。これによるとしげ子は飛び抜けて美人ではないが十人並みの器量を持ち、小作りな身体の女性。そして良く動く「伶俐な眼」と「魅力的な」唇の持ち主であったとされる。また江口渙の『わが文学半生記』(一九五三年七月、青木文庫)では、一見したところきれいだが際立った美人ではないが、しなやかな身体に「媚態をふかくかくし」た女性であり、またその使い方をよく心得た人物であるとされる。また彼はしげ子を芥川の「晩年の少なくとも三〇パーセントは支配した女性」として捉えている。

このように、同時代人によるしげ子の像は性的な魅力をもった女となっている。これは先に述べたように先ず芥川の自殺あつてのしげ子像

なので、ここでは彼女の知性や教養と言ったものは無視されていることに注目しなければならない。

二 女学生

秀しげ子は日本女子大学校(現在の日本女子大学)の第九回生の卒業生だがこの時代女学生とはどのように見られていたのかというと、女性が高等教育を受ける割合が少なかつたため高等教育を受けたというだけで進歩的な発想を持っている(『新しい女』)と意味づけをされていた。

だが実際には高等教育を受けることで人間として自立できたかと言えばそうではなく、立身出世をする男性の妻になるに相応しい女性であるという証明つまり花嫁資格に使われていた。

村上信彦氏の『大正女性史 上巻 市民生活』(理論社、一九八二年七月)に寄れば、女性が自己の知的欲求を満たすため女学校に進学するには大正を待たなければならなかつた。なぜなら世間が女性の進学を求める一方、女性に対する専門教育は知識人男性には受け入れにくいものだったからだ。前時代的な女性観のもと女性に高等女学校以上の教育を受けさせることは出産力の低下につながる原因になることや、良妻賢母のためには不要であるなどとして、一九一七年には文部大臣・岡田良平が官立の専門学校設置を拒否していたとある。

では、秀しげ子が在学中の日本女子大学校はどのようなものだったか、明治四十年(一九〇七)の二月二〇日から二十六日まで、『読売新聞』に「都下女学校風聞記」という項目で日本女子大学校が取り上げられ連載されている。

「勢力中の勢力」³⁾「女子教育を語るもの、先づ日本女子大学校を想起さない者はあるまい。」⁴⁾「他の女学校に類なき其の□□なる建物を見ただ

けでも、自ら首肯する あるだろう。」⁽⁵⁾「勢力を成してゐる中でも更に勢力を成してゐるのが□の学校」と好意的な評価をしている。

世間の日本女子大学校への評判に関しては、「誉める者あれば罵る者もあるといふ」⁽⁷⁾。「随分□の学校の生徒を墮落女学生の標本の様に謂ふ者もある⁽⁸⁾」と述べており、当時の日本女子大学校の評判は人によって分かれていたようだ。

このような評判に関して、『読売新聞』は、墮落女学生を「腐った蜜柑」に、日本女子大学校を「蜜柑の入っている箱」に喩え、思うところを述べている。日本女子大学校の生徒は墮落女学生の標本だという意見に対しては言いすぎであると述べ、墮落女学生が少数いたところで、日本女子大学の生徒が全員墮落女学生だとは言ふことはできないと言っているが、「万二其の中に一つ二つの腐れ蜜柑がある場合に、放心すると伝染して全箱悉く腐れ蜜柑になる心配は確かにある」⁽⁹⁾との危惧も述べている。

次に自治的な機関があったことに関して書かれている。「運動会だろうが、文学会だろうが、万事生徒の方で仕切つてするのだ」⁽¹⁰⁾。「自治機関の発達してゐるのは、流石に感服すべき点も少くはない」⁽¹¹⁾など、当時桜楓会を中心に生徒が学校運営に関わることが新しい試みであったことが分かる。

またこの学校を設立するに当たつて多くの寄付があったことから、寄付者を招待する御馳走会が頻繁に行われていたそうだ。そのことに関しての生徒の様子を「大臣だろうが大隈伯だろうが、世間如何なる名士と雖も格別豪いとも畏しいとも思つてゐないと云ふ度胸がある」⁽¹²⁾と評している。

また、一九二二年六月二三日の『読売新聞』に日本女子大学校の生徒

の卒業後の進路に関する記事があった。就職者は少なく、むしろ就職する卒業生の方がまれであるとする内容だった。「由来男と違つて就職せねば生活の道が立たぬと云ふものは殆どなく、従つてよく□の事情のあるものでなければ就職を望まぬ。」ともある。

唐澤富太郎氏の『女子学生の歴史』（木耳社、一九七九年四月）には、明治四十年代に、アメリカ主宰のミスコンクールにて、日本の代表として選ばれた女学生が退校処分になつた話や男女が二人連れで歩いているのを警官が二人がかりで尾行した話が載つていた。また、この本によると当時の新聞に、女子学生の心得も載せられ、其の心得というのが、日常の男子との接し方に関して細かく統制する内容だつたそうだ。

中村政雄編の『日本女子大学四十年史』（日本女子大学校発行、一九四二年四月）には、一九〇六（明治三十九）年を始めに「女子高等教育反動時代」が訪れたと書いてある。さらに「本校入學志願者の数も激減し、一九一一（明治四十四）年の創立第十周年を迎へて本校としては未曾有の困難時代に遭遇するに至つた。」とあり、一九〇六（明治三十九）年を始めに「女子高等教育反動時代」が訪れたと述べられている。

『日本女子大学四十年史』の付録にある、在学生数の統計によると、一九〇六（明治三十九）年からしげ子が在学していた一九二二（明治四十五）年までの全校生徒数は

三十九年	一七〇名	一〇一一名
四十年	一六二名	九四七名
四十一年	一四九名	八二〇名
四十二年	一〇六名	六五〇名
四十三年	六六名	四九八名
四十四年	六九名	四九一名

とあり確かに減っているのがわかる。

大正時代は、大正デモクラシーなどもあり、女性というもののあり方が大きく変わってきたことがいくつかの文献からも伺える。秀しげ子が大学に通っていた時代はちょうど女子教育のあり方の認識が大きく変わりつつある女子教育の過渡期だったことがわかる。

三 当時の恋愛

大正期は〈自由恋愛〉という考えが産声をあげていた時代である。この時代知識階級の女性だけでなく、一般大衆の女性をターゲットにした女性誌が多く出版されるようになったことで多くの女性が恋愛や結婚、夫の放蕩などについて生々しい実態を紙面で述べられるようになり男性中心社会に疑問と義憤を感じそれを共有するようになっていた。しかし未だ〈自由恋愛〉による結婚は少なく結婚は親の決めた相手と行うという考えが一般的だった。

この時代、多くの女性を悩ませていたのは夫の放蕩だろう。女性には「貞操」を強制する一方で男性が妾を囲うことや、遊郭に通うことは容認されていたため性のモラルは著しく女性に厳しかった。

その最たるものが一九四七年まで存在した姦通罪である。姦通罪とはすでに結婚している者が配偶者以外の者と肉体関係を持つことを禁じた法であるが、女性の場合相手が誰であっても罪の対象であり、夫はこれを理由に離婚を迫ることができた。しかし、男性がこの罪に問われる場合は相手の女性が既婚者であり、その夫から訴えられたときのみであった。つまり男性は独身の女性相手ならば何人と関係を持つのが罪ではなかったのである。だが女性は経済的に自立出来ない立場にあったため夫

のこうした不貞に対して堪えなければならなかった。

しげ子と芥川の場合はどちらも既婚者であるためしげ子の夫・文逸が芥川を訴えれば芥川自身にも処罰があった筈である。姦通罪の主な解決方法は金品を渡すことだった。しげ子と芥川、文逸の間でどのような問題が扱われたのかは今後の課題としたい。

四 〈秀しげ子〉まとめ

しげ子を調べていく内に当時の女性がいかに社会に縛られていたのかわることが出来た。確かにしげ子は芥川と不倫と言う関係であったことは現在の倫理観でも褒められたものではないが、元々は芥川からのアプローチで始まったこの関係をしげ子にのみ責任を負わせる従来の考え方はしげ子のそして女性の心情を無視しているのでは無いだろうか。

また、彼女の活動は短歌だけに止まらず婦人活動にも参加する、積極性と社交性に富んだ人物であることが伺える。当時は新聞にコメントを寄せ女性歌人として子供とどう接するかなど述べ、『明眸』という雑誌では時代を代表する歌人たちと共に活動し、人々の人気を集めていた姿は、芥川研究の中に見られる色好みの「文学少女崩れ¹³」というしげ子の姿とは異なっている。今日まで名を文学の世界に残すことの出来なかったしげ子だが、当時は女性歌人として華やかに活動していたことが分かる。まだ女性が活躍することを善しとしなかった時代、秀しげ子のような活動的な女性は男性にとって理解することが難しく一種の恐れや嫌悪を感じる存在だったことが彼女を〈魔性の女〉にしてしまったのではないだろうか。惜しまれるのは江口渕がしげ子の声を拾わなかったことである。芥川との関係について語りたと言ったしげ子の申し出を断ったことでしげ子側から見た芥川像は永遠に閉ざされてしまい、しげ子が当時どの

ような気持ちを抱えていたのかは誰にも分からない。しげ子の生々しい声が残っていたら彼女のイメージはもっと違ったものになっていたのではないか。

「資料 秀しげ子略年譜」

中田睦美氏の論文掲載を基に秀しげ子の略歴を述べる。

明治二十三（一八九〇）年

八月二十日小瀧頭八の次女小瀧しげ子として生まれた。出生地は東京都神田区錦町二〇番地だが、父・頭八は長野県埴科郡南条村の出身で、高利貸を営んでいた。母は芸妓上がりのたすけ（芸妓名をそのまま戸籍にしたらしい）。この時点では二人は婚姻関係がない。

当初しげ子は豊かな家庭で不自由なく育ったという考えだったが、頭八の経歴を見ると六歳頃までは何らかの苦労はあったといえる。

明治二十五（一八九二）年

十二月九日 弟、辰雄誕生

明治二十六（一八九四）年 十二月七日

二十九歳まで無籍だったたすけは長野県小縣郡上田町の小平語次の次女となり戸籍を得る。

明治二十八（一八九五）年 三女、きよ子誕生

明治三十四（一九〇二）年 五月十六日

頭八、長野県南佐久郡内山村の竹花可寿と婚姻

明治三十五（一九〇二）年

八月二十日、可寿との間に長女・覚子。

十一月二十日、たすけとの間に四女・不二子誕生。

明治四十一年（一九〇八）年 可寿との間に次女・知恵子誕生

明治四十二（一九〇九）年

二月九日可寿と協議離婚。同日たすけと入籍。

四月十三日、日本女子大学校（現日本女子大学）家政学部第九回生として入学。学籍名簿には（小瀧しげ）と記載。小学校は特定されていないが高等学校は日本女子大学校の付属高等女学校という意見が強い。八月十七日、五女・百合子誕生。

明治四十五（一九一三）年

四月十三日、日本女子大学校家政学部を卒業。

この年しげ子は七歳年上で帝劇の照明等を扱う電気技師・秀文逸と結婚している。中田睦美氏はこの結婚の時期を「秀夫人の片影」を参考に四月説を唱えているが、高宮檀氏はこの説に対して従来から有力だった十一月結婚説を唱え反論している。結婚時期に論争があるのは文逸が大正元年七月下旬から九月初旬の間に出国し半年の留学を行っていたからである。高宮檀氏による調査では法律的な結婚概念（入籍）は大正元年（一九一二年）十一月十四日（木曜日）だと断言している。

大正三（一九一四）年

長男・不二彦を出産。しげ子は心臓が弱かったらしく、母乳を与えたり、抱いて歩くなどは出来なかったという。

大正五（一九一六）年

十月十五日、青鞥の後を受けて登場したピアトリス社主催の第一回「故女流作家追慕会」に出席。ピアトリス社については同月二十三日付の『東京朝日新聞』に活動内容と機関雑誌『ピアトリス』・会員が紹介されしげ子も載っている。この頃からしげ子の活動は活発になり鞆音（ともね）という号でしばしば登場している。鞆音とはしげ子が好きな泉鏡花の作品に登場する女性から取ったものだが、それがどの作品の登

場人物なのかは分かっていない。

大正六（一九一七）年

一月三日、『女の世界』主催の「かるた會」に出席し、午後十一時過ぎの散会後の帰り道、電車に乗ろうとしたが三人の男性たちがもつと歩くよう主張したので三人の女性と共に随分と歩いた。など、社交性が見えるエピソードがある。この頃のしげ子は頻繁に『女の世界』『ピアトリス』『潮音』などに作品を寄せている。

大正八（一九一九）年

四月、太田水穂の選で「祈」六首がともね子の名前で『潮音』に掲載される。その中で『御柩を送りかへれば』という歌は成瀬仁蔵の葬儀を歌ったものだと言われる。

六月十日、十日会で芥川龍之介と出会う。

六月十一日、芥川より手紙と短編集を送られる。

大正九（一九二〇）年

三月の『潮音』以降しげ子は歌の署名を「秀しげ子」に統一する。理由ははっきりしていないが、一つには芥川との出会いがあるのではないかと言われている。しかし、芥川と出会う以前から時折「秀しげ子」を使用していることを考えると、歌人として小説の登場人物から借りた名より、自分自身の名を使うほうがより一層心情を表しやすいつ感じようになつたのではないかと考えられ、中田睦美氏は「一女性の内実を率直に歌うという意思の表明」と捉えている。

十月、雑誌『新潮』において「根本に觸れた描写」と題して芥川の「秋」を批評する。これは芥川の作品には女性の心情など本質が書かれていないと述べたもので、女性の苦しい生活が女性誌に取り上げられていたことを考えるとしげ子が作品に対してもどかしさを感じるの是最も

だろう。

大正一〇（一九二二）年一月 次男・一彦誕生

大正十一（一九二二）年

一月一日『讀賣新聞』にしげ子の歌が単独で一〇首掲載される。

二月二十七日『讀賣新聞』に春草会記念として春草会の説明と、代表の茅野雅子をはじめとする会員六名の写真が載り、しげ子も写っている。

大正十二（一九二三）年

九月一日 関東大震災発生 当日のしげ子の様子などを伝える資料は無い。十月になると、春草会の会員たちが新聞などを利用し互いの安否を確かめようとする動きが見られる。

大正十三（一九二四）年

一月、前年の十一月に潮音社が呼びかけた被災社友の義捐金名簿にしげ子も載る。

大正十四（一九二五）年

三月一日泉鏡花の全集出版記念会が開催される。祝賀会には秀しげ子・芥川龍之介の両名が参加した。他にも芥川周辺の人々やしげ子と関係のある人々が参加している。

大正十五（一九二六）年

七月中旬、鶴沼海岸の東屋旅館に滞在したしげ子は近くの貸家に家を借りていた芥川を病氣見舞いに訪ねる。

昭和二（一九二七）年

一月、「現代女流百人一首」（『婦人公論』）に一首掲載される。七月二十四日未明 芥川龍之介自裁。享年三十五歳。しげ子は彼の葬式を弔問。

昭和四（一九二九）年

次男・一彦の豊島師範付属小学校入学式に出席し、芥川の次男多志を

連れた文と出会う。入学式後しげ子は自身が芥川を追い詰めていたという自覚は無かったと告げるも文に言い返される。

昭和十一年（一九三六）年

南部修太郎の通夜に出席。⁽⁴⁾

昭和二十八年（一九五三）年

三月十一日 江口渙宛てにしげ子より手紙が送られる。芥川と自の關係について聞いてもらいたいという内容だったが、江口はしげ子に会わなかった。

昭和四十六（一九七三）年

三月に享年八十四歳で亡くなる。

十二月、春草会の発会五十五周年記念として『五十年集』が編まれ、しげ子の自選歌からは遺族から出された十七首が収録された。

なお本年譜作成にあたり、田中睦美氏「『秀しげ子』のためにⅡ―〈噂〉の女の足跡―」を参照した。

〔付記〕引用にあたり、旧字体は全て新字体に改めた。

注

(1) 中田睦美「『秀しげ子』のためにⅠ―芥川龍之介との邂逅以前―」『論究日本文学』一九九六年十二月

「『秀しげ子』のためにⅡ―〈噂〉の女の足跡―」『論究日本文学』一九九八年五月

(2) 神田由美子「特集 芥川龍之介と田端 芥川文学のヒロイン像―芥川文と秀しげ子―」『湘南文学』二〇〇〇年一月『読売新聞』

(3) 一九〇七（明治四十年）二月二十日朝刊三面 一行目

(4) 右に同じ 二―三行目

(5) 右に同じ 四―五行目

(6) 右に同じ 六―七行目

(7) 右に同じ 八―九行目

(8) 右に同じ 十―十二行目

(9) 右に同じ 十八―二十一行目

(10) 一九〇七（明治四十年）二月二十一日朝刊三面 二四―二五行

(11) 一九〇七（明治四十年）二月二十日朝刊三面 五七―五八行目

(12) 一九〇七（明治四十年）二月二十二日朝刊三面 二四―二七行目

(13) 岩井寛「芥川龍之介 芸術と病理」金剛出版 一九六九年十月

(14) 岩井寛氏は南部修太郎の通夜に訪れたしげ子の様子を瀧井孝作が厚化粧のしげ子を見て「阿呆の広告の格好で、亦横着にも見えた」と評していることを紹介している。

参考文献

高宮檀「芥川龍之介の愛した女性―「藪の中」と「或阿呆の一生」に見る」彩流社 二〇〇六年七月

森本修「芥川龍之介伝記論考」明治書院 一九六四年十二月

『年表・日本女子大学の90年』日本女子大学成瀬記念館編 日本女子大学 一九九一年四月

『日本女子大学家政学部100年の歩み 補遺』

日本女子大学家政学部100年研究会編 日本女子大学教育文化振興桜楓会出版 二〇〇五年一月

千野陽一『近代日本婦人教育史―体制内婦人団体の形成過程を中心に』ドメス出版 一九七九年五月

渋谷久子『近代日本女性史①教育』鹿島研究所出版会一九七〇年八月
関口安義編『新潮日本文学アルバム 芥川龍之介』新潮社 一九八三年十月